OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	社会教育の観点からみた地域教育文化運動-子ども劇場おやこ劇場運動を事例として
Author(s)	福嶋, 順
Citation	大阪大学教育学年報. 2002, 7, p. 231-244
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8969
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第7号（2002年）
Annals of Educational Studies Vol.7

社会教育の観点からみた地域教育文化運動
－子ども劇場おやこ劇場運動を事例として

福嶋　順

【要旨】

地域教育文化運動とは、1970年代を中心に全国的に広がった、さまざまな地域住民主体の教育文化運動の総称である。代表的なものとして、子ども劇場おやこ劇場運動、子ども文庫などがあげられる。子どもを中心とした地域の文化環境づくりを、住民の自主的な取り組みとして、先駆的に行ってきた。本論文では社会教育研究における地域教育文化運動研究の課題の一つである、個々人に即した運動の教育的役割を、子ども劇場おやこ劇場運動を事例として、活動への参与、参加者からの聞き取りを通して考察した。親に関しては、その活動への関わり方を4つのタイプに分類し、子どもは年令段階ごとに、それぞれに異なる運動の意義を考察した。異年齢の子ども集団づくり、子どもに関わる青年層の発掘、世代間の交流、家庭とも学校とも異なる多様な価値観の提供など、運動がそこに関わる個人に提供してきたものは、かつて地域が担い、今日「地域の教育力」という言葉でその重要性が指摘されている教育的役割を、相当程度担いうるものである。従来の地縁的共同体のあり方とは異なり、価値観や目的意識を共有することによるつながりである選択的地域コミュニティとして独自の価値を有していることが明らかにされた。

はじめに　社会教育研究における地域教育文化運動の研究課題

地域教育文化運動とは、1970年代を中心に全国的に広がったさまざまな地域住民主体の教育文化運動の総称である。用語としてはそれほど確立されたものではなく、共同の子育て運動、親と子の教育文化運動と表現する文献もある。代表的なものとして、子ども劇場おやこ劇場運動、親子映画運動、子ども文庫等があげられる。子どもを中心とした地域の文化環境づくりを、市民の自主的な取り組みとして行い、さまざまな先駆的な活動が行われてきた。その実践は社会教育の分野でも大きな役割を果たしてきたと考えられ、社会教育行政のあり方を考えるうえでも、そこから多くの教訓を引き出すことができよう。

これまでの社会教育研究における、地域教育文化運動についての研究動向を大まかに分類すると、1970年代、80年代、90年代の三期に分けることができる。「子どもの学校外教育」が関心を集め、全国に拡がりつつある運動が注目されはじめるのが70年代の傾向である。80年代は、運動がよりいっそうの広がりを見せ、増山（1986,1989）・佐藤（1989）の論考を中心に、理論研究が深まる時期である。そしてNPOやネットワークなど、市民運動をめぐる新しい動きへの注目が高まるのが90年代だといえる。

しかし運動の内実は必ずしも明らかにされているとはいえず、多くの研究の余地を残している。また、近年新しい市民運動のあり方として、NPOやボランティアに注目が集まり、社会教育とこれらの関わりについても研究が始められているが、こうした新しい動きと、従来の地域教育文化運動との関係も明らかにされていない。こうした状況をふまえて、地域教育文化運動研究の課題として以下の三点が上げられる。

まず第一に、地域教育文化運動の実践が、それに関わる一人一人の大人と子どもにとって、どのような役割をはたしてきたかを検証することである。実際の活動の中から生まれた実践集などは数多くの成果が残されているが、各個人のレベルで運動がどのような役割を果たしてきたかは、未だ十分に明らかにされていない。

第二に、まちづくり・ネットワークへの関心の高まり、NPO・ボランティアといった新しいタイプの市民活動の興隆と、地域教育文化運動をめぐる状況（運動の量的縮小（図1参照）・新たな方向の模索等）との関係を考察することである。前者の興隆と後者の退潮の背景にある教育要求の変化等の要素が明らかにされなければならない。

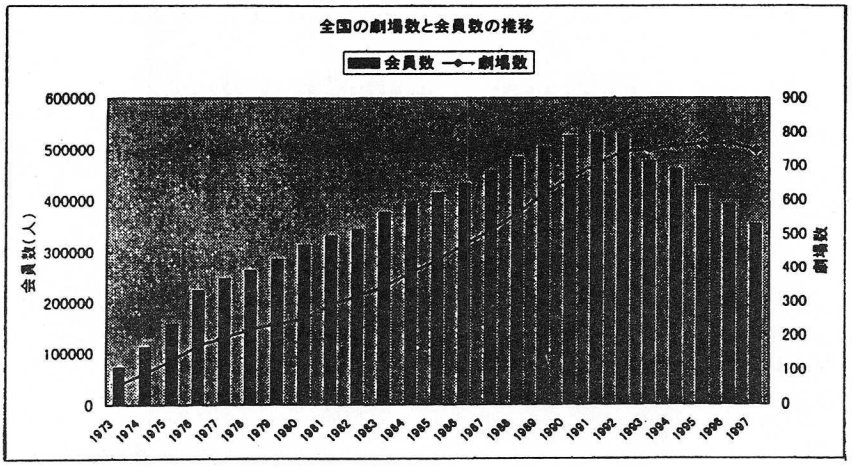

図1 全国の劇場数と会員数の推移

第三に、地域教育文化運動の実践の積み重ねから得られた成果・教訓から、これからの社会教育のあり方を展望することである。地域教育文化運動が追求してきた、地域における子どもを中心とした「豊かな」文化環境づくりを、これからの社会教育の中で確かなものにしてゆくための、行政・市民それぞれの役割を明らかにすることが必要となろう。

こうした問題意識のもと、一番目の課題である個人に即した運動の教育的役割を検証する作業として、子ども劇場おやこ劇場運動を事例とし、活動への参与と参加者からの聞き取りをおこない、そこから得られた考察をまとめたものが本論文である。

地域教育文化運動の事例研究ー子ども劇場おやこ劇場運動

子ども劇場おやこ劇場運動[1]とは、「すぐれた舞台芸術を鑑賞し、その創造・発展のために努力すること、それを通して子どもの友情と自主性、創造性を育み、健全な成長をはかること[2]」を目的として、1966年に福岡で生まれた運動である。文化団体“福岡子ども劇場”の設立（初年度会員192人）というかたちで始まったこの運動は、以来その理念に賛同する人々の手によって、各地に“劇場”が設立されることで全国各地に広がり、1997年5月現在で北海道から沖縄までの全都道府県に739劇場、合わせて334855人の会員がいる（全国子ども劇場センター調べ）。

1．社会教育における役割と成果

社会教育の分野でこの運動が全体として果たしてきた役割は、これまでの研究の成果もふくめて以下の四点があげられる。

(1) 舞台芸術鑑賞の場の提供

第一に子どもに豊かな文化環境を保障することを目的に、地域に親子の舞台芸術鑑賞の場を提供してきたことである。それぞれの劇場の予算規模や活動方針によって異なりはあるものの、多くの劇場で年4回から6回の「例会」として、舞台鑑賞がおこなわれている。内容は演劇がその多くを占め、他には人形劇、音楽、芸能などがある。子どもの年齢に合わせて、高学年例会と低学年例会とに分けて設けている劇場や、例会一回あたり、二、三作品の中から選ぶ形式をとっている劇場がほとんどであり、幼児から中高生までを視野に入れた幅広い鑑賞機会を提供してきたといえよう（表1参照）。都市のホールでの鑑賞活動のみな

らず、公民館などを舞台とした地域公演や、都市部の劇場の分割による、より地域に密着した文化活動の展開、空白地公演など、全ての子どもを視野に入れた活動の広がりを模索してきた。子どもだけではなく、親子で鑑賞することで「感動を共有すること」が大切にされている点も特徴的である。実際の鑑賞にあたっても単に観るだけではなく、創造団体との事前事後の交流会や作品の合評会など、「組織的意識的な文化創造の取り組み（畑・千野1987）」が大切にされている。

(2) 地域における「自主活動」

第二に地域に親と子どもと青年の新しい人間関係をつくり、遊び、交流、学習、表現の場をつくりだしてきたことである。鑑賞活動と並んで「地域文化の創造」のために欠かすことのできない活動として、「自主活動」が位置づけられている。「自主活動」とは、鑑賞活動以外に会員同士が地域でおこなう自主的な活動の総称で、ほとんどの劇場では何らかのかたちでこうした自主活動がおこなわれている。目指されているものは、「異年齢の子ども集団づくり」や「子どもの自発的な自己表現の場づくり」といった言葉で表され、具体的には「子どもキャンプ」や「子どもまつり」といった、子どもの自主的な活動を中心としたものから、ドラマスクール（演劇体験学習）、児童劇団づくりなどの表現活動などがある。また親に対する子育て支援や、地域社会への問題提起の取り組みとして、講演会やシンポジウムなどをおこなっている劇場、民謡・太鼓といった地域の伝統文化継承の活動に取り組む劇場など、多岐にわたっている[3)]。

表1　茨木北部おやこ劇場年間行事（1992年）

	鑑賞活動	自主活動(3)
1月	低学年例会（以下低）(4) 「寿見のちゃら平」 劇団うりんこ 高学年例会（以下高） 「ザ・バトル」 クロスミュージック	越年登山
2月		劇場成人式
3月	低「ボロチョイサーカス」 むごん劇かんばにい 高「アンネの日記」 劇団民藝	大阪府高校生交流会
4月		新入生歓迎会 第2回おやこまつり 中・高生の集い（月1回）
5月	低「大どろぼうホッツェンプロッツ」　人形劇団ひとみ座 地域特別例会 「おっきな人間とちっちゃな人間」　劇団風の子	
6月	高「南の島の少年　マウイチキチキ」　人形劇団ひとみ座	子どもキャンプ開村式
7月	低「たかはしぺんコンサート」 たかはしぺん音楽事務所	第8回ファミリーキャンプ 子どもキャンプに向けた事前の取り組み続く
8月		第8回子どもキャンプ
9月	低「ちびっこカムのぼうけん」 銀河鉄道 高「桃太郎くんがゆく」 鳥獣戯画	
11月	低「三人であそぼ」 劇団青芸	廃棄ハイキング 子ども手づくり市
12月	高「いつも箱にパラダイス」 劇団うりんこ	クリスマス会

この自主活動の分野で大きな役割を果たしているのが、「青年」とよばれる若者層の関わりである。「青年」とは、劇場内の言葉で高校生、学生、勤労青年、フリーターといった、子どもでもなく、子どもを持つ親でもない立場で劇場に関わっている若者を指す言葉である。劇場運動はその当初から「青年」の関わりが会内に位置づけられてきた。増山（1986）が、劇場運動が生みだした教育的価値の一つに「子育てにおける〈青年〉の役割の発見」をあげていたように、独自の集団を組織する「青年」は、親とはまた違った価値観と立場をもって子どもたちに関わる存在であり、その行動力と子どもたちに対する影響力は、とりわけ「異年齢の子ども集団づくり」を目指す自主活動において、大きな役割を果たしてきた。青年が位置づき、青年ブロック独自の活動が年間を通しておこなわれている劇場（表1参照）では、小学生、中学生、高校生、青年、そして親へと、劇場の中でその年齢に応じた役割を果たしつつ育ってゆくサイクルを認めることができる。

このように劇場運動における自主活動は、この運動が単なる芸術文化運動のみならず、より日常的な子どもの生活の有様に注目した生活文化創造の運動であったことを示している。子どもを中心とした新しい共同体のあり方を地域に模索する運動であったといってよい。しかし、こうした理念と数々の先駆的な取り組みの一方で、それが必ずしも各劇場、各個人にまで共有されていたとはいえない、という点にも留意が必要である。

(3) 行政への働きかけ

第三に子どもの文化環境の改善のための運動に取り組み、行政に対する働きかけを通じて一定の成果をあげてきたことがあげられる。全国的な運動として最初に取り組まれたものが、入場税の撤廃運動である。劇場が運動の中心となって署名活動や国会請願をおこない、それを通じて免税点の引き上げという成果を得た。その後もこどもの文化予算の増額、文化にかかる消費税の反対、「子どもの権利条約」の実現に関する要望といった分野での運動が展開された[4]。

それぞれの地域においても、舞台鑑賞のためのホール建設運動に代表されるように、子どもの文化環境整備を目指した運動が展開され[5]、一定の成果をあげてきた。行政に要求するのみならず、自分達でこども文化の拠点をつくる活動[6]もあり、注目に値する。

(4) 子どもの文化を軸にしたネットワークづくり

第四に創造団体との関係づくりをはじめとして、こどもの文化を軸にした協同・ネットワークを構築してきたことである。

創造団体との関係においては、各地の劇場運動の全国連絡組織である全国子ども劇場おやこ劇場連絡会が、日本児童青少年演劇団協議会・日本青少年音楽団体協議会のそれぞれと、劇場のおこなう鑑賞活動について、候補作品の紹介の基準や例会前後のトラブルへの対応などについて申し合わせをおこなっている。同時に、こどもの文化の豊かな発展のために互いに手を取り合い、運動を進めてゆくことを確認している。また、それぞれの地域においても、鑑賞活動の取り組みを通じた作品の評価や、相互の交流を深めてきた。

また劇場運動に関わる親がそこでの経験や問題意識を持って、PTAや、子ども会などに積極的に関わったり、共同で事業を行うなどして、地域や学校の環境改善に取り組んできた地域もある。また近年増えてきたのが、行政、他団体との協働である。これまでの活動で培ってきた専門性を生かして、行政からの事業委託を受けたり、行政や他団体と共同事業を行う事例などがある。

2. 親、子ども、青年それぞれにとっての劇場運動

上に述べたように全体としてみれば、非常に大きな役割を果たしてきたといえる運動も、その理念に対する理解や評価、活動への参加のあり方は人によって非常にさまざまであり、より総合的な把握のためには個人に即した分析が必要である。劇場運動に関わる人には大きく分けて親・子ども・青年の三者がある。また、同じ親の中でも運動への関わり方の違いによって、子どもにとっても各年齢段階に応じて、運動から得ているものは異なっている。こうしたそれぞれに異なる劇場運動の意義について以下では個別に考察した。また、それぞれの末尾に、その立場に分類される人からの聞き取りなどで得られた声を付している。

(1) 親と劇場運動

まずは運動の中心となってきた親（主に母親）について考える。活動への参与を通じて、こうした親の関わり方はいくつかのタイプに分類出来ることがわかった。これまで一面的に捉えられてきた運動も、その内部にはさまざまな人の関わり方を含み、活動から得ているものも異なっている。それぞれについて個人（家族）と運動との関係を考察してみたい。もちろんここで示した「型」は理念的な分類であり、実際にはさまざまな中間層が存在し、すべての劇場会員がいずれかに分類されるというものでもない。また、当初サービス享受型であった人が次第に参加協力型へと変わり、リーダーとしての役割を担うようになり、その後賛助会員型になって支援を続けるということも実際にあり、ある程度流動的なものとしてとらえる必要はある。

(A) 先導的リーダー型

運動を、中心となって担っているメンバーである。地域に劇場をつくるときに発起人となった人、現在事務局や運営委員など活動の中心となって活躍している人があげられる。運動の理念に対する共感も高く現状への問題意識も高い。自らが運動を担っていくことを自覚しながら活動している層といえる。活動も自分の子どものためというよりも、すべての子どものためにするという意識がもっとも強いのがこの層だといえよう。自分の子どものようにほかの子どもにも接する人もあり、子どもが自立し、子育てに一定の区切りがついた後も劇場運動に関わり続けていることも多い。

地域社会においては劇場運動を通して、またそれ以外の場においても優れた地域文化の分野のリーダーとなっていることが多い。子どもにとっての芸術・文化の必要性の啓発、地域の人間関係づくりを個人のレベルで非常に積極的に行っているという点において、地域の教育・文化の面で大きな役割を果たしている。中には個人的に子ども文庫の世話人をしている人[7]や、劇場で子育てを終えた母親が中心となって、新たに大人のための文化活動に取り組む事例[8]もある。こうした人々を発掘し、活躍の場を与えてきたことも劇場運動の成果の一つに数えてよいだろう。また、運動自体の持つ教育的機能－子どもを取り巻く現状への気づき、組織で活動する上での組織論や民主主義的手続きの学習、活動づくりのノウハウの習得などといった、現状に気づき、それを変えてゆく力を付けること－の効果を、もっとも強く受けている層でもある。ここでは個人にとって劇場運動は社会参加の場であり、いわゆる「自己実現」の場ともなっている。ただ、全体的にその数はそれほど多くはない。数多くの人が活発に活動している劇場もあるものの、一つの子ども劇場に一人か二人のことも多いというのが現状のようだ。

事務局員についても若干ふれておきたい。劇場運動では劇団との連絡調整など、ある程度専門的な知識を必要とし、しかも金銭的にも非常に責任の重い仕事が必要となるため、そうした仕事を専門に行う専従事務局員をおき、活動の拠点として事務所を持っているところがほとんどである。事務局員には会費収入の中から少額ではあるものの手当が支払われ、「子どもの文化を専門に行う職業」として成り立たせてきた。多くの事務局員が先導的リーダーとして、全体の活動を通して関わっている。

「子どもというのは私たちにとって夢であり未来です。私たちの時はあまりよくない人生であったかもしれないけれど、子どもたちの時代こそはすばらしい時代にしたいというふうに誰でも願うものでしょう。そしてそう考えればこそ、子どもたちには最高のものを与えたいと思いました。(中略) 演劇や音楽を鑑賞する鑑賞例会と、集団でいっしょにあそんだり、自分たちでやる自主活動。これらをやりましょうと出発したのが子ども劇場のはじまりでした」(青木　1983、16頁)

「文化や芸術は人がもつ根元的なものを揺さぶるものだから、それに出会ったときに人が変わるのが実感できる。子どもも大人も変われるような会にしたい。自分で考えて自分で決める子どもを育て、子どもの自立とそれを助ける親をつくるのが劇場の役割だと思う。私自身、子どもも自分も劇場に育ててもらった。みんなでつくってゆく会なので、一人ずつを大事にしてみんなで物事を決めてゆくのが大切。その中で人の話を聞いて自分の意見を話すことを覚えられる。劇場は『民主主義の学校』だと思う。これからの地域の中で『子どもの地域文化』に取り組んでゆけるのは劇場しかないと思う。」(あるおやこ劇場の事務局へのインタビューより)

(B) 随伴的リーダー型

「他に人がいない」「回り持ちで」といったやや消極的な意識ではあるものの、活動の中でリーダー的役割を果たしている層である。リーダー的役割を果たしている人のうち過半数はこうした層が占めているように見受けられ、会の代表者でさえそうであることもある。どちらかといえば自治会やPTA役員を引き受けるのに近い意識である。もちろん劇場運動への関わり－会員であること－自体は個々人の選択によるものではあるが。

ここに、劇場運動の一つの特徴が見て取れるように思われる。つまり、劇場運動そのものが理念として「みんなで無理を出し合う」ことを前提としており、こうした必ずしも積極的ではなくとも、活動自体は子どもにとって必要だと考える人々を広く巻き込むことで広がってきたといえるからである。時には、

「自分が劇場運動を中心になって担っている」と考え行動する人が、誰もいなくても活動が成り立っているということもありうる。劇場運動のすぐれて共同体的側面が見て取れるのではないだろうか。一部の人がサービスを提供するのではなく、当初から「みんなでつくる運動」を意識し、地域でそれを支える人材を生み出し続けてきた、という点にもそれがあらわれている。

先導的なリーダーと比べて、リーダー的立場にいる期間は必ずしも長くはない。しかし活動を通じた社会参加や、学習、人間関係づくりという点において多くのものを得ているといえよう。運動を離れたところでも、人間関係が続いているということもある。もっとも「いろんなことで自分の時間がなくなりしんどいばかりだった」「子どもや家庭のことがかえっておろそかになってしまった」という声もあり、必ずしもそれぞれの中でプラスとばかりはとらえられてはいないし、その後運動から離れていく人もいる。しかし劇場運動のかなりの部分はこうした「リーダー」によって担われてきたといえよう。

「最初は見るだけの会員でした。たまたま時間的な余裕があって、機関誌づくりやブロック長を引き受けるようになり、その後例会部長や運営委員を経て運営委員長になりました。別にそんな自分に能力があるわけでないけれど、やれるかなやれるかなと、一緒にやってくれる人と楽しみながらやってこれました。それでも責任をもつ立場なので、いつも劇場のことが頭にあって休まる暇がなかったこともありました。感性を育てるというのは目に見えないものだしすぐに結果もでない、それを待ち続ける劇場はすごいと思うけれど、一方でみんなにそれを言ってゆくのがつらいときもあります。最初は子どものために、あとは自分の楽しみとして、人と話したり自分で作り上げていく楽しみに目覚めたように思います。いろんな勉強もさせてもらい、一主婦で家事に追われる人生に終わっていたかも知れないのにくらべれば、ずいぶん良かったと思います。いろんな人に出会えていろんな話ができて、友達がたくさんできたことが一番の財産です。」（あるおやこ劇場の元運営委員長へのインタビューより）

ここまで運動のリーダー的立場にある人について検討してきたが、留意しておく必要があるのは、その中のかなりの割合をいわゆる専業主婦が占めてきたということである。畑（1995）、恒吉（1997）が指摘しているように、こうした女性の自立、社会参加、主体形成の場として劇場運動があったということもいえよう。また、もう一つリーダー的役割を果たしている層として「青年」があげられるが、これについては（3）で考察する。

(C) 参加協力型

運動のリーダー的な立場には立たなくとも、鑑賞活動や自主活動などによく参加し、一定の役割をひきうけて協力する層である。単なる参加ではなく、親を含めた「無理を出し合う」関係の一端を担い、劇場運動の基盤を支えている層ともいえる。子どもとともに、ある程度劇場が生活の中に位置づいており、少なくとも子どもにとって必要なことだという意識をもっている。また自分もその関わりに楽しみを見つけていることが多い。実際会議などで集まるたびに、子どものこと、学校のこと、受験のことなどの話題で盛り上がる。

劇場以外にさまざまな場で活動している人も多い。これはリーダー的な役割をしている人にもいえることだが、子ども会、PTA、ボーイスカウト・ガールスカウトなど、子どもに関わる分野で積極的に活動している人が多いように見受けられる。子どもに対して一定の問題意識を持つ人、関わる時間的余裕のある人が、さまざまな分野で活動しているということだろう。

この層にとって、劇場運動とは自分と子どもの生活を豊かにするための関わりの一つといえそうだ。芸術鑑賞の場として、また地域で（職場や近所づきあい等とともに）人間関係をつくり、交流する楽しみのある場所の一つとしてである。

「いとこが劇団をやっていたこともあり、知り合いからも誘われて入りました。値段（会費）も最初は高く感じたけれど、子どもにはいろんな世界を見せられたと思います。画面ではなくて生で。近くで見に行けるのもいい。手伝いや役をひきうける中で母親どうしのつながりもできて、いろいろ聞けるの

もいいです。」

「会議など大変だけれどやっていかないとしかたがないし、年上の子どもがいる人から、中学校のことや受験のことをいろいろ聞けるのがいい。実際にはなってみないとわからないと思うけれど、今からでも気持ちの準備ができるので。」

「引っ越してすぐ勧められました。最初は自治会みたいにみんな入るものかと思っていました。看板やポスターづくりもわけも分からずやっていたけれどそれはそれで楽しかった。劇を見るところと思っていたけれどサークル活動などそれ以外にも楽しい場がありました。今は劇とキャンプがメインです。子どもの学年や学校がちがっていても楽しくやらせてもらっていて、いい活動をつくってもらってると思います。子どもだけでなく親のつながりもあるのがいい。」（以上聞き取りより）

(D) サービス享受型

運動を一緒につくるというよりも、会費に見合ったサービス（主に舞台鑑賞）を享受することを主な目的とする意識の層である。劇場運動においては、「お客さん会員」としてあまり好ましくないあり方とされてきたが、それでもおそらくほとんどの劇場において、こうした傾向をもった会員がかなりの割合を占めているのではないかと思われる。自主活動には消極的であまり意義を見いださず、自分の子どものために舞台鑑賞の機会を与えることが主な関心事といえる。

自由な時間のあるなしや、運動に対する思い入れの差などによって、一人一人の意識に差が生まれてくることはさけられないことでもあろうし、こうした人々も巻き込んできたからこそ劇場運動がここまで全国的に広がったともいえよう。しかし、一部の会員がサービスを提供する側に回らざるを得なくなり、負担が大きくなることもある。実際のところは劇場によってさまざまだが、多くのところはそうした負担を積極的に引き受ける人の存在に頼っているし、また劇場そのものが変質してきて、いわゆる鑑賞団体としての活動しか行っていないところもある。理念を全面に出しすぎると、かえって「全ての活動にはついてゆけない」と遠ざかってしまう人もいるという。劇場運動の理念と現実の乖離が顕著に現れている面である。もっとも活動に参加した当初は、ほとんどの人が多かれ少なかれこうした意識を持っており、参加し、交流する中で次第に意識を変えてゆく人もいる。

「自分の子どもを見ていて感性が育っているのを感じます。舞台の感想を書くときもただ面白かったと書くだけだったのが、だんだん自分の思いを文章に表せるようになってきて。すぐに目に見えないものだけれど、文化にお金を使うという意識はもってきました。積極的には会員拡大などできていませんが、地域活動に誘われて参加するのは子どもたちも喜んでいました。最近は忙しいのと自分の中で馬力がなくなってしまって。」（会員からの聞き取りより）

「劇を観るだけだと思っていました。他の活動も魅力はありますが、子どもが小さいので参加しにくい。鑑賞だけだと思うと会費は高い気がします。」

「何もお手伝いできなくて申しわけありませんが、現代社会にとってこれから育つ子どもたちにとって大変貴重な役割をもっていると思います。いつもごくろうさまです。」（以上子ども劇場船橋センター会員アンケート[9]より）

(2) 子どもと劇場運動

続いて運動の対象である子どもについて考えてみたい。子ども達は劇場運動から何を得ているのか。子どもを対象とした調査はあまりないが、一つの参考資料として、1983年に全国子ども劇場おやこ劇場連絡会が行った、全国の劇場の会員4980名を対象にしたアンケート調査のデータの一つを見てみたい（図2）。調査の仕方としてはやや不十分なものであるが、ある程度の傾向は見て取ることができよう。今回の調査で得た、実際に劇場で活動している（してきた）子どもと青年からの聞き取りとあわせて、各年齢段階ごとに考えてみたい。

(A) 幼児・小学校低学年

基本的に鑑賞活動が中心である。図2からもうかがえるように、もっとも楽しみとしていることは鑑賞活動であり、仲間づくりへの関心はまだ低い。これは年齢的にもまだ親の影響が強く、劇場での活動も基本的に親と一緒に行うことがほとんどであるからだろう。また友達関係も大抵は同じ学校の近所に住む子どもに限られており、より広い範囲から子どもが集まる劇場は、友達を作る場としてはそれほど魅力的ではないようである。「低学年のうちはおいでといったらついてくる」という母親の言葉もあったが、自分の選択として関わっているというよりも、親に連れられるままに参加している面が強い。もっとも舞台鑑賞自体は非常に楽しみにしている子どもが多いし、自主活動については、子ども祭りや親子キャンプ、表現活動など親とともに、もしくは親に参加を勧められる範囲で、楽しむ場としてあるようである。

「テレビより迫力がある。劇を見るのは楽しみ。前に外人の人がやったのが良かった。やめたくない」(小3)
「いろんな劇見れた。例会は面白い。」(小3　以上聞き取りより)

(B) 小学校高学年

図2においては、小学校の高学年での特徴として、「友だちが増え、異年齢や他の地域（他の校区）に友だちができた」という項目が大幅に増えている点があげられる。劇場運動の、特に自主活動の分野で目指す「子どもの自主的な活動づくり」や、「異年齢の子ども集団づくり」といった取り組みに、自分から参加することができるようになってきたことの表れといえる。親と一緒に行動するより、子どもだけの活動を好む傾向もある。行動範囲も広がり、他校区や異年齢の人間関係も視野に入ってきているということもあろう。

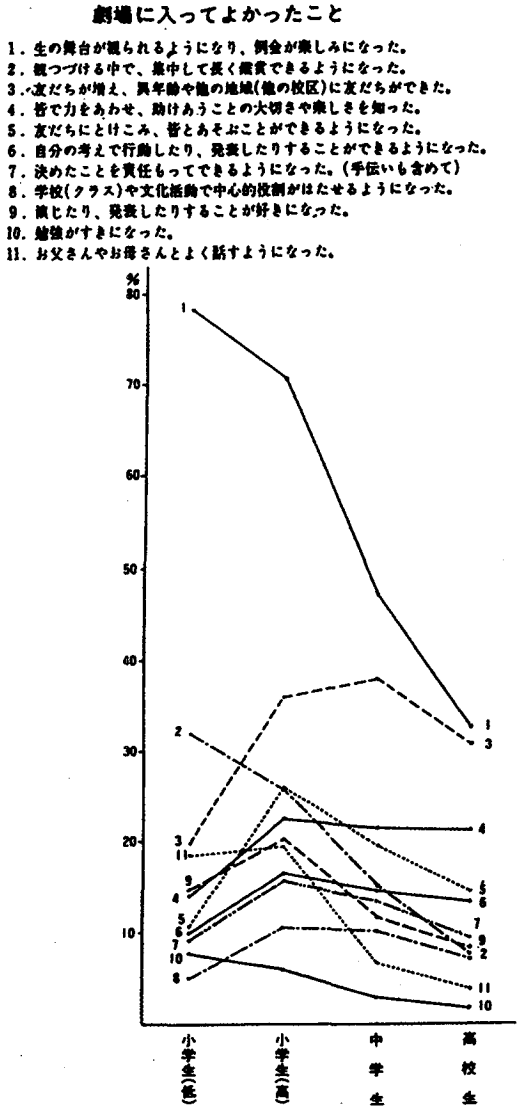

図2　全国子ども劇場おやこ劇場連絡会
『子どもの文化と自主活動（3)』P19より

とりわけ青年の活動が活発な劇場では、青年が中心となって行う、主に小学校高学年以上の子どもを対象にした行事があり（表1参照)、子どもにとって大きな魅力となっている。こうした自主活動はひと月かふた月に一度は行事があり、日常的な人間関係には直接つながらなくとも、ある程度の人間関係をつくることができている。特に取り組みの中心に位置づけられている「子どもキャンプ」では、小学生も青年もみな対等な立場であることを前提に、「仲間づくり」を目標に準備段階から頻繁な取り組みが用意されている。「劇場を通した人間関係づくり」のシステムが確立しており、小学校高学年であれば「自分のことは自分でやる」といった、各年齢段階ごとの課題も集団の中に共有されている。「キャンプから帰ってきて子どもが少したくましくなったように見えた。」という母親の感想を聞いたが、異年齢集団の教育力の現れといえよう。

もちろん全ての子どもが自主活動に参加するわけではなく、鑑賞活動も重要な地位を占めている。図2においても、「例会が楽しみ」という回答はかなりの割合に昇っている。しかし一方で自己主張も強まっており、「舞台鑑賞が面白くない」という声も聞かれるようになれば、それをきっかけに退会することもある。より主体的に活動を選ぶ傾向が現れているといえよう。劇場の側も高学年例会を設けるなど、年齢に応じた作品を選ぶ努力をしており、この年齢では依然鑑賞活動が魅力的なものとなっている。

「面白い経験ができた。狂言とか観たことなかったし。バナナのたたき売りも。初めて見た劇はまだ覚えてる。(子どもまつりで) お店とかやるのも楽しい」(小5)
「楽しい体験できた。キャンプとか、劇観たりとか。でもキャンプの方が好き。劇を観にいかないといけなくて遊べなかったときもあった」(小6　以上聞き取りより)

(C) 中学生

小学校高学年でみられた自主活動への意識の高まりが中学生ではより強くみられる。しかし、全体に占めるその人数比は少なく、かなりの部分が中学校に上がる段階で劇場を退会している。理由としては部活動、塾などで忙しくなるからというものが非常に多い。一方会員を続けている中学生にとっては、それがより主体的な選択によるものであり、生活の中により大きな位置を占めているといえよう。自主活動や人間関係を重視する傾向は、いっそう強まってくる。高校生や青年からの聞き取りにおいても、「キャンプがなかったら中学生でやめていた」「いろんな友達ができるのがよかった。例会（鑑賞活動）は部活とかであまり行ってない」という声が聞かれた。鑑賞活動をより重視する中学生ももちろんいるが、概して自主活動に参加すればするほど、自主活動への思い入れが強くなり、相対的に鑑賞活動の地位は下がっているようだ。

青年集団とともに行う自主活動は、中学生にとっては身近に目標とできる高校生や青年がいることや、家庭や学校とは異なる価値観を得る機会となる意義を持っている。また中学生独自の活動も行われており、自ら活動をつくる主体として参加しているということがいえよう。

「得したことは違う学校に友達ができたこと。子ども嫌いも少しましになった。たまに休日がつぶれるのが損といえば損。例会は楽しいけれどどちらかというと青年とかとのキャンプとか、月に一回中学生で集まって、会議して遊んでるほうが楽しい。それから劇場のことやってて、親の外面の良さが分かるようになった。ちょっとしたことでその場では笑ってても、帰りの車の中でうるさく言われる。」(中2　聞き取りより)

(D) 高校生

高校生は青年とともに自主活動を中心となってつくってゆく役割を担っている。青年とともに定期的に集まる場を持ち、子どもを対象としたさまざまな自主活動を企画、運営している。劇場の事務所を一つのたまり場のようにして集まり、にぎやかにしゃべりながら、青年や母親にせかされて、会議を進める風景が見られる。こうした活動を通じて企画力、会議の技術、親や子どもたちと関わる力、責任感といった子ども集団のリーダーとしての力量を形成している。もっとも子どもたちとの関係づくりにおいては、指導者やリーダーとして臨むというより、友達づきあいの延長として対等な立場で関わっているように見受けられる。また活動する理由を聞いても、子どものためというよりも、自分がやっていて楽しいからという意識が強い。たいていの高校生は小さい頃から劇場に関わっているが、中には友人に誘われるなどして新たに加わる高校生もいる。

子どもたちとの活動のみではなく、バンドを組んでライブをしたり、府県レベルで各劇場の高校生が一堂に会して交流会を行うなど、自己表現の場として、また人間関係を広げる場として劇場を「活用」しているといえよう。学校や部活動での人間関係が、とりわけ学業成績や進路に関して均質的な集団となりやすいのに比べ、劇場の活動は多様な人のつながりを得る機会となり、違う価値観を学び世界を広げる一助なっているように思われる。ここでの人間関係はより日常的なものになり、のちのちまで続く友人関係を

築くことができている。

一方鑑賞活動については、図2においては一定の意義を見いだしているように見えるが、実際の聞き取りの中では自主活動に大きく意識が傾いていた。鑑賞活動を楽しみにしている高校生がいないわけではないが、「最近全然観にいっていない」「行ってみんなに会えるのはいいけれど舞台はどちらでもいい」「お金払ってるからまあ観ないと損した気はする」という声があった。実際会員数としてはかなり少数であり、鑑賞活動もどうしても小学生中心のものになりがちである。ある程度規模があり、中学生以上の会員も多い劇場では、中学生から大人までを対象にしたような作品にも取り組んでいるが、その数は少ない。

「劇場をやっていて良かったことは、友だちが多くなったこと。特に年上の人と知り合えたのが大きい。おかげで人生の豆知識が増えた。劇を見る習慣はついたかな。ときどき感動して泣いてしまうこともあった。」

「いろんな友だちとかおばちゃんの知り合いとかが増えていくのは良かった。でも母がいろいろ関わってた分、行かなきゃいけないような気分でうっとうしいこともあった。街中でいきなり（知り合いの母親に）呼び止められるのもいや。」

「毎年キャンプに行ける。あと他の学校の友達ができた。でも小学生とかうるさいときもある。他にやりたいことある時に時間をとられるのは困るときがある。劇を見て感性が育つとかは全然そんな気がしない。」（以上高校生からの聞き取りより）

(3) 青年と劇場運動

最後に、劇場運動における青年について考えてみたい。劇場運動においては、子どもを中心とした自主活動の担い手として、また時には、子どもに対する情熱を持って劇場運動そのものを強力に推進する役割を果たしてきた。就職先として劇場の事務局を選び、運動に尽力してきた青年も多い。自主活動の担い手として子どもたちに活躍の場を与え、学校や家庭とは違った姿を引き出すこと、子どもにとっての身近な目標となり、家庭や学校では得られない経験や価値観を提供してきたこと、そうした経験を通じて、親に対しても親のもつそれとは異なる視点や価値観を提供してきたことなど、人数的にはそれほど多くなくとも、その存在意義は大きい。親と子どもだけではなく、世代をつなぐ第三の立場として青年を位置づけてきたことが、活動の内実をより豊かにしてきたといえる。子どもたちとの活動の中で用いられる歌や踊り、ゲームなど劇場の青年に独自の「文化」ともいえるものを発展させてきたという面も興味深い。交流会や歌集づくりなどを通じて、全国的に広がっているのも特徴的である。

また青年自身もその活動を通じて自ら学んできた。運動に関わることで得ているものとしては、高校生の項目で詳しく見てきたのと同様のことが、よりいっそう強まったかたちで現れているといえよう。とりわけどの青年もが口をそろえるのが、劇場に関わっていなければ知り合えなかったような友達がたくさんできた、ということである。これは子どもの頃から劇場の活動に参加し、関わり続けてきた青年に劇場が残した最大の財産といえるかもしれない。

「みんな学校も年もバラバラで今も全然違うことやってるから、劇場でなかったら絶対お互い知らないままだった。小学校の頃からもう10年15年のつきあいになるけれど、これだけの人間関係ってそうそうないから。お互い一緒にいろんなことやってきて、今でも一緒に飲んだらキャンプの話などで盛り上がる。これがなかったらもっと狭い範囲の人間関係しかできなかったと思う。自分もずいぶんみんなに勉強させてもらったというか、おまえのここがあかん（よくない）と言ってくれたこともあるし、生き方みたいなところでも影響されてちょっとはよくなったかなとも思う。劇場をずっと続けてこさせてくれたことには親に感謝している。」

「やっぱり知り合いがたくさん増えたことでしょう。今でも高校生の連中とか、キャンプにきた小学生とか、ほかの劇場の青年とか。（中略）例会は、子どもの頃は楽しんでたと思うけれど、今はそれほどでも。いかなくてもいいかなと思うとついサボってしまう」（以上青年からの聞き取りより）

3．地域教育文化運動の教育力

聞き取り調査では、この運動の多様な教育的役割のあり方が示されている。まず第一に、この運動がすべての成員に保証してきたものとして舞台芸術鑑賞機会の提供ということがあげられよう。子どもにとって、舞台芸術を鑑賞する機会が年に一度の学校公演などにほとんど限られているわが国において、定期的にその機会を提供してきた運動の持つ意義は大きい。

さらに、鑑賞活動自体を目的にするのみならず、それをきっかけにしたさまざまな活動作りが行われている。特に子ども達に対しては異年齢の子ども集団作りを目指した人間関係作りが大切にされており、そこに参加する子どもにとっては鑑賞活動以上に魅力あるものとしてとらえられている。とりわけ、子どもの頃から活動に参加してきた中学生や高校生からの聞き取りにはそのことがよく示されているし、青年からの聞き取りではそこから多くを学んできたこと、この人間関係のもつ教育力が示されているといえよう。彼らにとって鑑賞活動は、もはやひとつのきっかけにすぎない。重きがおかれるのはそこにいかなる人間関係が存在するかということである。

また運動に参加する目的の第一は子どものためである親達にとっても同様のことがいえる。聞き取りからはより長期間、より積極的に活動に関わるほど、こうした人のつながりが一人一人にとって重要な意味を持つようになっていることが見てとれる。関わり方に応じて、人間関係が生まれ、学習・交流の場となり、さらには社会参加、主体形成の場としても存在しうることは、例えば「随伴的リーダー型」のメンバーからの聞き取りなどに如実に示されているとおりである。ここに行政や企業によってもたらされる文化サービスとは根本的に異なる、地域教育文化運動であることの独自の意義を見いだすことができる。鑑賞活動という扉の向こうに、人間関係とそれに基礎をおく豊かな学びの世界が広がっているのである。

他方こうした人間関係が、従来の地縁的組織とは異なったものであることは、地域網羅的な組織でないことや父親の不在、関わる期間や関わり方の多様性等からも言える。地域教育文化運動における人のつながりとは、地域共同体の再生といえるような、地域網羅的な組織づくりには至らなかったといえよう。地域づくりを一つの課題として掲げてきたものの、必ずしも「地域を変える」ことに成功したとはいえない。逆に運動が提起してきたものは、一定の地域的な基盤をもちつつも、問題意識や文化的価値観、教育要求を、ある程度共有できるところでつながる、共同体としてのあり方である。言うなれば「選択的地域コミュニティ」と呼ぶことができる。劇場運動の例でいうならば、子どもにとっての舞台鑑賞機会の必要性を共有する人々、子どもに豊かな文化環境をと願う人々の共同体である。つながりの第一歩としてこうした価値観の共有（選択）があり、そのことが共同体の構築を可能にしているのである。

今日の地域社会において、かつて存在したような地域網羅的な共同体を構築することは、特に都市部においては非常に困難である。地域教育文化運動は、そうした状況の中で新しい人のつながりのあり方を提起し、独自の教育的役割をもつことを示してきた。子育てという課題を共有する親のつながり、校区を越えた異年齢の子ども集団づくり、子どもに関わる青年層の発掘、世代をこえた人の交流、学校や家庭とは異なる多様な価値観の提供等、運動がそこに関わる一人一人に提供してきたものは、かつて地域が担い、今日「地域の教育力」という言葉でその重要性が指摘されている教育的役割を、相当程度担いうるものである。地域教育文化運動が社会教育の分野で果たしてきた最も重要な役割であるといえよう。

＜注＞

1）以下、「劇場運動」と略して表記することもある。また、各地域で活動する、単位のこども劇場、おやこ劇場等を、総称して「劇場」と表記する。

2）九州沖縄子ども劇場連絡会編　1993『花は野に咲くように』晩成書房　から、当時の設立メンバーの手記より

3）九州沖縄子ども劇場連絡会編　1993『花は野に咲くように』晩成書房　には各地の劇場のさまざまな実践が報告されている

4）高比良正司　1994『夢中を生きる』第一書林、青木妙伊子　1983『文化人間を創る』ささらカルチャーブックス　にはこの運動の有様が詳しく述べられている

5）全国子ども劇場おやこ劇場連絡会　1982『こどもの文化と環境（3)』には全国各地の劇場による、ホール建設

運動の様子が紹介されている。
6）九州沖縄の子ども劇場の共同による熊本県清和村の廃校を活用した「こどもの文化学校」や、宮城県高鍋おやこ劇場が中心となった「野の花館」建設の取り組みなどがある
7）茨木市の13の子ども文庫のうち、3つは劇場運動の中心となって活動してきた人が、代表になっている
8）茨木おやこ劇場の中心メンバーであった母親達が、子育てを終え、新たに大人の文化に取り組むために「茨木市市民文化の会」を立ち上げるといった例がある。
9）子ども劇場船橋センターが、2000年度に会員を対象に行ったアンケートの自由記述より

＜引用・参考文献＞

青木妙伊子　1983『文化　人間を創る』ささら書房
畑潤・千野陽一　1987「1960年代の親子文化運動研究～『教育と社会』に関する一考察」『東京農工大学一般教育部紀要』22,21-36頁
畑潤　1995「Ⅱ章1　子どもと大人の対話をひらく」佐藤一子・増山均編『子どもの文化権と文化的参加』第一書林、56-81頁
茨木おやこ劇場　1993『茨木おやこ劇場２０周年記念誌』
九州沖縄地方子ども劇場連絡会編　1993『花は野にあるように』晩成書房
小林文人猪山勝利編著　1996『社会教育の展開と地域創造』東洋館出版社
子ども劇場船橋センター　2000『会員アンケート資料』
子ども劇場全国　1998『第15回全国大会当日資料』
増山均　1986『子ども組織の教育学』青木書店
1989『子ども研究と社会教育』青木書店
1995「第一章　子どもの文化権とアニマシオン」佐藤一子・増山均編『子どもの文化権と文化的参加』第一書林、17-55頁
酒匂一雄　1978「学校外教育研究の今日的意義」『地域の子どもと学校外教育』東洋館出版社
佐藤一子　1989『文化協同の時代』青木書店
1992『文化協同のネットワーク』青木書店
佐藤一子・増山均編　1995『子どもの文化権と文化的参加』第一書林
多田徹　1985「(A)子どものための舞台芸術のあゆみ (四)1966～1975年」全国子ども劇場おやこ劇場連絡会編『子どもの文化と鑑賞活動（3)』26-37頁
高比良正司　1994『夢中を生きる』第一書林
恒吉紀寿　1997「第一編第二章　子どもと大人の自己教育主体の形成」神田嘉延・遠藤知恵子・宮崎山本登　1985『市民組織とコミュニティ』明石書店
全国子ども劇場おやこ劇場連絡会　1982『子どもの文化と環境（３)』1984『子どもの文化と自主活動（３)』

Movement for Cultural and Community Development Examined from the Perspective of Out-of-school Education

FUKUSHIMA Jun

This paper is a study of a movement for cultural and community development. As a case study, the paper focuses on the Oyako Gekijo Kodomo Gekijo Undoh (providing enjoyment of theatrical performances and encouraging participation in community development activities for children and parents) as a representative example of such a movement. Gekijo Undoh has allowed a large number of young people and children to enjoy various forms of theatrical performances and community activities and achieved great educational results.

In the context of research on out-of-school education, this movement has been analyzed only insufficiently in the past. Some limited research is available, but there have been no studies discussing its educational value and effect on individual life and community development.

In this study, I conducted a participatory research of Gekijo Undoh and interviewed many people who are involved in the movement focusing particularly on its educational implications for parents, young people and children. Among parents, I found out four types of participation: taking the leadership role, accompanying children, offering support and cooperation, and enjoying activities themselves. These four types are different from each other, and gain different educational values from the movement. There are different patterns in the preference of Gakijo Undoh activities among young people and children in terms of their age; younger children tend to enjoy theatrical performances while older children tend to enjoy community activities. However, for all age groups, cultivation of better human relationship is regarded as the most important factor behind their voluntary participation in the Gekijo Undoh. I believe that this is the most significant feature of this movement that indicates the potentiality of developing a selective community based on cultural activities.